

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

故里は海の町なり日の差さぬ路地の奥まで潮の香届く 安部 歌子

海辺の町で見掛ける故里の光景を感慨をこめて情緒ゆたかに詠みさわやかなひびきがあります。特に結句は的確な表現です。

【俳句】

漁師継ぐまだ童顔のサングラス 齋藤 聰次郎

県内の漁港でも後継者不足が言われている中、学校を終えたばかりの童顔の少年。父の後を継ぐ存在感がまぶしく、郷土の漁業者の点景として親近感を覚える。サングラスは夏の日よけめがねの意を超えて、少年の逞しさと恥じらいに加え、まだ揺れている心情をもカモフラージュしているようで効果的。

【川柳】

傷ついた地球を包むエコパック 西坂 瑞人

地球は今ボロボロに傷ついている。いつ終わるとも知れない戦争に、加えての地震、噴火、豪雨などの自然災害に、人間は本当に手をこまねくことしか出来ないのだろうか。エコパックという優しい言葉が心に染み込む力作である。

【詩】

「晩夏」 小林 延子

身辺整理は衣類など物だけでなく、この作品ではもう少し深い精神性に及んでいる点を評価したい。白木の箱で帰還した父の写真、「もういいですよ」と選り分けるときの、ふと射す戦争のかげ・・・単なる父恋いだけでなく、終連の自然描写、もう少し推敲してほしい。比喻が通りにくいところがあるので。

【散文】

「蝉のなきごえ」 丹 史郎

祖父と蝉の思い出を書いている。少年の頃、主人公が出雲の祖父の家に行くと、庭の松で蝉が鳴いている。その松の木は幼少期に祖父が植えたもので、大木に育っていた。親戚の子供が松で鳴いている蝉を捕って、凧糸に括りつけて空に飛ばして遊んだことがあった。すると、老人はすごい剣幕で叱った。子供は面白さのために蝉の凧揚げ遊びをしたのだが、蝉を大切にしていた祖父はその行為を許さなかったのだ。蝉は成虫になってから、一ヶ月も生きない。祖父は殊にそんな蝉を愛（いつく）しんでいた。やがて、祖父は認知症にかかって死去した。主人公は祖父の法事に来るたびに、少年の日の蝉にまつわる出来事を思い出す。祖父は少年に蝉を通して生きることの意味を教えたのである。作品は規定の二十枚に達しない小品であるが、生きている意味を伝える好作品である。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

青天の光のごとく堂々と自信を持てる人になりたい 塚本 優太

心に汚れなく、言動に曇りなく、人におごらず臆することなく、自信を持って明るく堂々と生きる人になりたいという、中学生らしい率直純粋な希望と願いが、読む者の同感を呼んで胸を打つ。少年たちがこのように成長していく姿を願い夢見てこの歌を大賞に選んだ。

【俳句】

光る汗仲間とつないだ一つの輪 佐藤 慎也

スポーツでの試合の景であろうか。顔や額に光る汗には、仲間たちと力を合わせ、目標を達成した満足感がただよう。一つの輪は仲間との一体感の意もあり、スポーツ以外の場としても読め、少年たちのすがすがしい勇姿が彷彿する。

【川柳】

かっこいいくつをはいたらおどりだす 平瀬 空哉

明るく言葉のひとつひとつから楽しいリズムが聞こえてくる。かっこいいクツってどんな色かな、ひもがついているのかな。かわいい作品に、大人も子供になって、いっしょに踊り出したくなった。

【詩】

「登校」 熱田 翔也

構成がしっかりしており、感覚的にも優れていて楽しい。〈海の上を歩いて行くみたい〉とか、冬は坂を上ってずんずん寒くなるとか、夏の太陽の熱の描写、草や木のニオイまで感じとっている。終連で初めて廃校の話に転ずるこの転じ方がすっきりとうまい。学校はもう無くなってしまふ〈山もさみしくなる〉とは実に簡潔で鮮やかな結びの表現だ。

【散文】

「夜の河童に会いに」 井上 晴紀

作者は「少年と河童の出会いと別れ」を、自由奔放な創造力を駆使して見事なファンタジーとして表現している。筆者自身が執筆しながら楽しみ、その楽しさが読み手にも伝わってくる傑作である。原稿用紙二十枚という分量を見事に書き切り、物語の構成、「河童語」としてのカタカナの使用、余韻の残る終末等に工夫の跡がみられる。また、しっかり推敲していることがわかる。感性が豊かである作者の、今後の活躍に期待したい。